

令和六年度 茨城県立つくば看護専門学校一般入学試験 国語 問題用紙	受験番号	氏名	
---	------	----	--

※解答はすべて解答用紙にマークすること。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

虚子の写生は、子規の写生とどう違うのか。子規は、近代の理念として写生をと考えたが、虚子は、それを俳句の技法として師から受けついだ。むろん子規の理念がなければ、虚子の俳句は存在しない。ただ、おそらく子規に欠けていたのは、俳句が近代の詩になるためには、写生という理念が技法として成熟しなければならぬという認識であった。近代の新しい俳句もまた、やはり前近代の（ア）ハイカイ師たちと同じように、それを芸として認識する存在を必要としたのである。

遠山に日の当りたる枯野かれのかな（明治三十三年）

桐一葉日き当りながら落ちにけり（明治三十九年）

虚子といえば必ず引き合いに出されるほど、ともに写生の代表句としてポピュラーなものだ。写生という方法意識がなければ、こういう陽射しの描写は生まれなかっただろう。つまり「遠山」や「桐一葉」を、そこに当たっている陽射しとともに描き出すという（イ）ハツソウは出てこなかった。おそらく読者のだれもが、こういう風景をあたかも映画の場面のように、鮮明に思い浮べることができる。絵や写真でなくて映画のようだといってみたのは、動きがない「遠山」の風景でさえ、そこに当たっている陽射しが **A** を感じさせてくれるからだ。それは遠くの山に陽が当たっている像が、読者がいつかどこかで見た現実の風景に結びつくからであり、その両者を結びつけることが、すなわち写生という方法のモチーフにほかならない。子規の唱えた写生は、虚子のこういう句を得ることによって、ようやく技法として成熟したといえるべきだろう。

写生が俳句に（ウ）コユウの方法になるとは、俳句性との折り合いがつくということだ。

①写生画のように俳句を書こうとした子規は、必ずしもその折り合いをうまくつけることができなかった。たとえば子規は、ハイカイにおける季の約束を、まるで写生のモチーフのように、季語として近代俳句に持ち込んだ。しかし季語という約束事は、そこに抱え込まれた和歌的な美学の（エ）カクン性において、眼前の対象をありのままに描く写生の方法とは矛盾する。その矛盾を、子規は正確に認識していなかった。写生と俳句性の折り合いがつかなかったのはそのためである。

② 虚子の俳句が実現したのは、ほかでもない写生と季語との折り合いであった。ここで引いた二句は先にも(才)シテキしたように、写生という方法意識が、あたかも映画の場面のよう遠山や桐の葉に当たる陽射しを描き出してみせた。けれども、その描写だけで俳句が成功しているわけではない。それらを俳句的な表現として成り立たせているのは、まさに「枯野」なり「桐一葉」という季語なのである。そのことに虚子は意識的であった。一句に季語を使う意識は、写生という方法意識とは関係ない。虚子自身がいうように、それはあくまでも季題趣味の問題である。ただ虚子はその季題趣味を、写生の技法によって近代風にアレンジしようとしたのである。

具体的に説明するには、二句目のほうが適切だろう。ここで一句の主題は「桐一葉」であるが、この主題自体は、眼前のものを描写するという写生の意識から出てきたわけではない。あくまでも秋の季語として、作者の季題趣味から選択されたものだ。季語としての「桐一葉」は、「一葉落ツルヲ見テ歳ノ将ニ暮レントスルヲ知ル」(淮南子)や「一葉落チテ天下ノ秋ヲ知ル」(文録)という中国の古典をその本意とするもので、「一葉」あるいは「一葉落つ」といっても同じである。つまり「桐一葉日当りながら落ちにけり」の句は、「桐一葉」という季語の本意にきわめて忠実なことがわかる。そして、

B

(仁平勝『俳句が文学になるとき』)

ということになる。そこに近代風のアレンジとして、まさしく虚子の写生の方法があった。

〔問題1〕5 傍線部(ア)と(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

〔問題1〕

a ひどくコウカイする

〔問題2〕

a キソウ天外な話

b カイメツ的な被害

b ジョウソウ教育

(ア) ハイカイ

c ゲンカイを越える

(イ) ハッソウ

c 疑惑をイッソウする

d カイサイを叫ぶ

d ソウイ工夫を凝らす

e カイギャク趣味

e 事故にソウグウする

〔問題3〕

a 心臓のコドウ

〔問題4〕

a 父のカンキをこうむる

b コセイを大事にする

b アッカンの演技

(ウ) コユウ

c 謝礼をコジする

(エ) カンネン

c カンマンな動作

d コグン奮闘する

d カンショウ用の植物

e 少年時代をカイコする

e カンタン相照らす仲

〔問題5〕

- a プロにヒツテキする実力
- b 巨額の脱税をテキハツする

(オ) シテキ

- c 窓のスイテキが垂れる
- d テキセイに処理する
- e 予感がテキチュウする

〔問題6〕 空欄Aにあてはまる最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- a 風景
- b 場所
- c 空間
- d 時間
- e 故郷

〔問題7〕 傍線部①の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- a 子規は季語が内包する伝統的なカンネン性にとらわれて、客観的な写生の方法が貫徹できなかった。
- b 子規は季語が内包する伝統的な美的情趣を無視して、季語の外面や季節感を客観的に表現した。
- c 子規は写生という近代の俳句特有の方法を用いたが、俳句性という俳句の目的を表現できなかった。
- d 子規は伝統的な美的カンネンをはらむ季語を写生によって表現する技法が十分とはいえなかった。
- e 子規は眼前の対象を客観的に表現しようとしたが、見たままを写実的に写し取ることはできなかった。

〔問題8〕 傍線部②の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- a 虚子は写生という近代の方法と季語という伝統的な言葉のそれぞれの長所を巧みに融合した。
- b 虚子は対象を細密に描く写生の方法によってカンネン的な季語の世界に臨場感をもたらした。
- c 虚子は伝統的な季語の情趣を近代の写生の方法によって近代風に再構成しようとした。
- d 虚子は写生という近代の現実的な方法と季語というカンネン的な言葉を調和させた。
- e 虚子は写生という技法を用いることで、季語の持つ伝統的な美意識を簡易平明に表現することに成功した。

「問題9」 空欄Bに入る文の内容としてふさわしいものを、次の中から一つ選びなさい。

- a 「桐一葉」があらかじめ与えられた季語の本意とすれば、残った「日当たりながら」と「落ちにけり」が虚子のオリジナリティだ
- b 「桐一葉」と「落ちにけり」があらかじめ与えられた季語の本意とすれば、残った「日当たりながら」が虚子のオリジナリティだ
- c 「桐一葉」と「日当たりながら」があらかじめ与えられた季語の本意とすれば、残った「落ちにけり」が虚子のオリジナリティだ
- d 「日当たりながら」と「落ちにけり」があらかじめ与えられた季語の本意とすれば、残った「桐一葉」が虚子のオリジナリティだ
- e 「日当たりながら」があらかじめ与えられた季語の本意とすれば、残った「桐一葉」と「落ちにけり」が虚子のオリジナリティだ

「問題10」 正岡子規や高浜虚子と特に関わりの深い句誌として最も適当なものを次から選び、

記号で答えなさい。

- a 「馬酔木」^{あしび}
- b 「アララギ」
- c 「スバル」
- d 「層雲」
- e 「ホトトギス」

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ローマの時代に「帝王紫」と呼ばれた貝紫は、天然の染料が出せる最も高雅な色彩といわれ、ローマの皇帝たちが競って手に入れようとした。フェニキアのシドンやティルスは聖書にも出てくる都市ですが（ローマと覇権を争ったカルタゴはティルスの植民地でした）、これらの都市は「貝紫で栄えた」といわれています。もちろん①誇張した表現ですが、それくらい重要な貿易の品目でした。この「貝紫」はユーラシア交易のルートを通じて中国に伝えられる。もともと中国では黄色が最も貴い色とされてきたが、この貝紫があまりに高雅な色彩なので、王侯貴族が紫の方を貴ぶようになる。保守主義者である孔子が「紫が天下を乱す」と言って嘆いたくらいです。日本の聖徳太子が中国の制度にならって古代国家の初めてのシステム形成をしようとしたとき、冠位十二階の最高位に「紫」を置いたことには、ユーラシア幾百年の歴史の背景があった。日本の禁色には紫のほか、くちなし、^{おうだん}黄丹、^{しんび}深緋、^{しんす}深蘇芳があります。もともと、花などの色彩の鮮明なものに対する、この時代の人間たちの強烈な感動と畏れの前提とし、この色彩を権力が②排他的に帯身し、あるいは配分することを通して、権力への畏怖畏敬の感覚に転化すること（社会学の用語でいうと感覚の権力による〈水路づけ〉canalization）に、禁色の社会的な

本質はあったといえます。

この「禁色」と対比して柳田国男が「天然の禁色」と名づけているのは、Aによる支配ではなく、Bの自発的な社会心理ともいうべき禁色でした。この時代の日本人は、染料技術的には相当に派手な色彩も使用できたのですが、色彩には「わざわざくすみをかけて」地味な色彩として用いていたという。柳田はこのことの原因について、それは人々が色彩について、「あまりに鋭敏であった」結果であると観察しています。別のところでは、「あまりに痛切なるゆえに」鮮明な色彩は用いることができなかったのだと書いています。③似たような心の動きは、例えば純白の衣類（カミシモなど）を、イロギ、イロカミシモ、イロギガミなどと、隠語化して表現する言い方にも表れています。「白」という色は、あまりに「清すぎ、また、明らかすぎた」から、いわば、電流の流れているような言葉で、ストレートに口にすることを避ける心理が働いていた。「天然の禁色」ということ背景には、人々の感受力、あるいは感動能力ともいべきものの、強さ、鮮烈さが存在していた。

（見田宗介『社会学入門』）

〔問題11〕 傍線部②「排他的」の対義語を、次から選びなさい。

- a 能動的
- b 消極的
- c 相対的
- d 抽象的
- e 協調的

〔問題12〕 傍線部①は何をさしているか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- a 貝紫をローマ皇帝と結びつけ「帝王紫」と呼んだこと。
- b 貝紫が天然の染料では最も高雅な色彩と呼ばれたこと。
- c シンドンやティルスが貝紫の貿易で栄えたとされたこと。
- d ローマの皇帝たちが競って貝紫を手に入れようとしたこと。
- e 聖書にある都市はみな貝紫を重視したといわれたこと。

〔問題13〕 空欄A・Bにあてはまる語句の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- a A―権力 B―民衆
- b A―保守主義者 B―民衆
- c A―権力 B―人々
- d A―保守主義者 B―人々
- e A―権力 B―日本人

「問題14」 傍線部③の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- a 特定の色に対するこの時代の民衆の好悪の感情。
- b 色彩に鋭敏なために鮮明すぎる色を避ける感覚。
- c 鮮明な色彩は宗教的な用途に限ろうとする考え。
- d ある種の言葉を仲間内だけで使おうとする心情。
- e 鮮明な色彩を権威付けのために取り入れようとする心情。

三、次の文章は、菊池寛『友と友の間』の一節である。主人公雄吉は京都の文化大学を卒業し、東京へ出てからも戯曲を書き続けているが、一高時代の旧友たちが文壇の重鎮である小説家松本藻石に深く私淑しているのに驚いた。その後生活のために新聞記者となった雄吉は、危篤の床にある松本藻石を新聞記者として取材するために訪問するよう命じられた。これを読んで、後の問いに答えなさい。ただし、表記については現代仮名遣いに基づき一部を改めた。

雄吉が、新聞社に入社して以来、一番苦痛を感じた仕事は、不幸や災害の涙に閉ざされている人を訪問することであった。社会部長から、特別に扱われていた雄吉は、文芸美術とか教育とか家庭とか、割合上品な仕事に差向けられていたが、それでも生憎外の人手のない時は、どんな仕事をやらされるか判らなかつた。

(中略)

彼は、到頭一策を考え付いた。杉村は、これから松本さんの家へ行くに違いない。久野や並河は向うにいるに違いない。それなら、自分自身訪問しなくても、久野や杉村を呼び出して様子を訊けばよい。そう思うと、雄吉は、やっと一条の活路が見出されたように思った。

雄吉が、芝の下宿を出たのは、もう夕暮に近い頃だった。彼は、本郷へ行く電車の中でも、杉村がまだ出かけないでいてくれればいいと思った。

本郷の三丁目で、電車を降りて、何時も目標にしている郵便函に添うて、横町に折れると、杉村が宿っている素人下宿へは、※十間の距離もなかつた。主婦のお婆さんに杉村の在宅を確かめて、案内もしないで、二階へ上って行くと、杉村は外出するばかりの扮装をしながら、部屋中を不安らしく歩き廻っている所だった。雄吉は、挨拶もしないでいきなり「どうしたんだい。まだ行かないのか。」と、訊いた。何時も、キチンと取済しているような顔をしている杉村は、平素よりももっと沈んだ様子をしながら、

「実は、今迷っている所なんだ。余り親しく出入りしたこともない者が、取込んでいる所へ行くのはどうかと思っているんだ。愈々亡くなられたと云うことになれば行ってもいいのだが。」と、云った。杉村が、云うことに無理はなかつた。杉村や久野は、金曜会に時々顔を出しているとは云っても、まだ日数が浅いし、松本さんとは、知合であつても、松本さんの奥さんや、数多くの

令嬢などは、顔さえまだ見知らない程であったのだ。その上、見舞にも、ロクロクいっていない者が危篤と云う時に、あわてて駆け付けるのは、①不穩当でもあれば無躰でもあったのだ。が、それが無躰であるとすれば、雄吉が新聞記者として、入って行くのは、それとは②段違いの無躰に違いなかった。雄吉は、杉村の言葉で、前よりも一層悄気ながら、それでも思った通の計画を捨てようとは思わなかった。

「しかし、久野は行っているのだろう。」

「ああ行っている。彼奴の所へは、電話がかかって来たからな。」と、杉村は答えた。

「久野が行っているなら、君も行ったって、そう変でもないだろう。実は、松本さんが、危篤だと云うことを、社の方へ知らしてやったら、社で僕に行ってくれと云うので、大に参っているんだ。僕は松本さんとは馴染も薄いし、殊に記者として、こんな場合に松本さんの家へ顔を出すのは、どうにも堪らないと思うのだ。君なら僕よりは度々行っているし、行ったって変じゃないだろう。僕は傍迄一緒に行って待っているから、病状や何かのことをよく訊いて来て、教えてくれないか。」と、雄吉は心から頼んだ。

「③ああそっか。じゃ、僕は行く」と云いよう。行った方がいいと思っていたのだ。」

雄吉と杉村とは、直ぐ杉村の下宿を出て、江戸川の電車に乗った。無口な杉村は何か一人で考え込んでいた。

雄吉は、自分の職業上是非とも喰わなければならぬ葦の苦さを、しみじみ味わっていた。

彼とても、松本さんの危篤に対して、純な悲しみと心配とを懐き得ない訳ではないのだ。が、

④職責の意識はそうした純な悲しみや心配を、散々濁してしまっているのだ。杉村や久野や、並河は松本さんの危篤を文豪の危篤、恩師の危篤として純粹に悲しみ純粹に心配しているのだ。雄吉はそれに対して悲しみながらも、自分の仕事の題目にしなければならぬのだ。そう考えると雄吉の心は、現在の自分を憫むあじきなさ^{あわれ}に似た心持で一杯になった。

(菊池寛『友と友の間』)

(注) ※十間……「間」は尺貫法の長さの単位。一間は約一・八メートル。

「問題 15」 傍線部①「不穩当」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- a 様子や事情がよく分からないこと
- b 不可思議であること
- c 必要でないこと
- d さしさわりがあつて適当でないこと
- e 悪いことが起こりそうな兆があること

〔問題 16〕 傍線部②「段違いの無駄」とあるが、それはどういうことか。説明として適するものを次から選び、記号で答えなさい。

- a 新聞記者として、知人であることを利用して松本を訪問し、記事にするべき情報を集めようとすること。
- b 新聞記者であることを利用して、さして親しくもないのに、危篤の松本を訪問しようと考えていること。
- c 松本の危篤という状況を利用して、新聞記者として、弟子たちの輪に入り込んでいこうとしていること。
- d 友人を利用して、新聞記者なのに自分では訪問しないで、価値のある情報を楽に得ようとしていること。
- e 新聞記者であることを利用して、家族の意向を考えずに、松本の病状を世間にさらそうとしていること。

〔問題 17〕 傍線部③「ああそうか。じゃ、僕は行くことにしよう。行った方がいいと思っていいのだ。」という杉村の言葉はどんな気持ちを表現しているか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- a 雄吉の苦境を知り役に立てるならと、ためらう気持ちを奮い立たせようとしている。
- b 行くことで自分の面目も立ち新聞社の友人に恩を売れることもできると、喜んでいる。
- c 危篤の松本を訪問することを躊躇していたが、雄吉を助けるという理由ができたことで気が楽になっている。

〔問題 18〕 傍線部④「職責の意識はそうした純な悲しみや心配を、散々濁してしまっている」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- a 新聞記者である以上取材が第一なので、ただ悲しんだり心配するばかりではいられないと思っていること。
- b 取材をする以上自分の感情は押し殺して、相手に嫌がられても必要な記事を書くのだと決意していること。
- c 新聞記者になってから様々な事件や事故に接して、純粹に悲しんだり心配したりできなくなってきたこと。

- d 取材対象に対しては、純粋な悲しみや心配を持って接するべきではないと思うようになってしまった」と。
- e 新聞記者の仕事は他人の苦悶を世間にさらすようなものなのだ、と常に肝に銘じるようになっていくこと。

〔問題19〕 次のa～eの中から、本文に即した雄吉の気持ちとして最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- a 社に松本の危篤を知らせたのには、文豪と自分の特別な親しさをひけらかしたいという気持ちがあった。
- b 友人達と同じように松本の病気を純粋に心配しているが、新聞記者としての自分は訪問してはいけない。
- c 新聞記者として松本家を訪問するのは無様であると杉村から暗に示され、すっかり気落ちしてしまった。
- d 詳しい病状を知らせるといふ頼みを何とか杉村に聞きいれさせて、この嫌な仕事を済ませてしまいたい。
- e 新聞記者なのだから取材のために友人を利用することはやむをえないと思うが、その後味はとても苦い。

四、文学史に関する次の問いに答えなさい。

〔問題20～22〕 次の文章の に入れるのに最も適当なものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

(問題20 ・問題21 ・問題22)

大正期の文学は、明治時代から引き継いだ自然主義文学が確立される一方、武者小路実篤の『』や志賀直哉の『』といった、人道主義的な立場で理想を追求しようとする「白樺派」や、永井荷風の『あめりか物語』や谷崎潤一郎の『』といった、享樂的で官能的な美を追求した「耽美派」などの反自然主義を標榜する文学が誕生した。

- a 五重塔
- b 痴人の愛
- c 友情
- d 破戒
- e 暗夜行路

〔問題23〕 芥川龍之介の作品を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- a 『蟹工船』
- b 『路傍の石』
- c 『戯作三昧』
- d 『山椒魚』
- e 『風立ちぬ』

〔問題24〕 『李陵』や『山月記』などの小説で知られる作家として正しいものを選び、記号で答えなさい。

- a 井伏鱒二
- b 大岡昇平
- c 井上靖
- d 中島敦
- e 森鷗外

五、熟語と慣用句に関する次の問いに答えなさい。

〔問題25〕 突然起こった大事件や衝撃のたとえを何というか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- a 青天の霹靂（へきれき）
- b 有象無象
- c 人後に落ちない
- d 金字塔を打ち立てる
- e 千載一遇

〔問題26〕 「恩を仇で返す」という意味で用いられない言葉はどれか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- a 獅子身中の虫
- b 後足で砂をかける
- c 尾生の信
- d 庇（ひたし）を貸して母屋を取られる
- e 飼い犬に手を噛まれる

〔問題27〕 「鬼の霍乱（かくらん）」の意味を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- a 道理に外れたひどい行いをする事
- b 普段温厚な人がひどく怒ること
- c 年をとっても心身共に元気があふれている様子
- d 何かが起こりそうな様子
- e いつも丈夫な人が珍しく病気になること

【問題28】 「月とスッポン」と同じ意味の慣用句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- a 豚に真珠
- b 提灯に釣り鐘
- c 割れ鍋に綴じ蓋
- d 豆腐にかすがい
- e 馬の耳に念仏

【問題29】 「無謀で、身の程をわきまえない行いをする」と「を意味する故事成語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- a 螻蛄の斧ろうこ
- b 羹あつものに懲りて膾なますを吹く
- c 梁上の君子
- d 捲土重来
- e 逆鱗さかぢに触れる

【無断転用禁止】

令和6年度 茨城県立つくば看護専門学校一般入学試験 国語解答

大問	番号	正解	配点	小計
一	1	e	2	35
	2	a	2	
	3	c	2	
	4	d	2	
	5	b	2	
	6	d	5	
	7	d	6	
	8	c	6	
	9	b	6	
	10	e	2	
二	11	e	3	20
	12	c	5	
	13	a	6	
	14	b	6	
三	15	d	3	25
	16	a	5	
	17	c	5	
	18	a	6	
	19	d	6	
四	20	c	2	10
	21	e	2	
	22	b	2	
	23	c	2	
	24	d	2	
五	25	a	2	10
	26	c	2	
	27	e	2	
	28	b	2	
	29	a	2	